



長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」(高萩市教育委員会提供)

伊能忠敬より早い日本地図先駆者

長久保赤水 知名度じわり

茨城・高萩 高い精度、功績を評価

江戸時代の地理学者、長久保赤水(1717~1801年)が近年、知名度を上げている。初めて実測で日本地図を作った伊能忠敬より42年早く、情報収集による精度の高い「赤水図」を作り、庶民や後世の知識人に広めた功績が評価され始めた。

赤水は茨城県高萩市赤浜の農家生まれで、幼い頃に両親を亡くした。親族に育てられながら、学問に興味を持ち、水戸藩の学者らの下で儒学や天文学、地理学を学んだ。30代半ばで正確な日本地図を作ろうと決意し、情報収集や各地の旅を経て、52歳で初めての地図を完成。功績が認められ水戸藩主の侍講になつた。

赤水の地図は天文学を取り入れたことで、日本で初めて経線と緯線が書かれ、比較的正確なのが特徴。中でも1779年に初版が完成した「改正日本輿地路程全図」(通称・赤水図)は

1821年に完成した伊能忠敬の地図は、伊能自らが実際に各地を歩き歩幅で赤水は、自分で集めた地名などの情報を地図に盛り込んだため、内陸の情報も

豊富だ。長久保赤水顕彰会の佐川春久会長(70)は「友人が多く、旅人にもお茶をごちそうして話を聞くなど、情報収集能力にたけていた」と強調する。赤水の関連資料693点は、2017年に眞指定有形文化財になるなど再評価が進み、国の文化審議会は今年3月、同資料を国の重要文化財に指定するよう文部科学省に答申した。さらに知名度を上げようと顕彰会は同月、赤水が地図に書き残した海上現象を元に、絵本「りゆうのひかり」を出版。縦約84cm、横約128cmの赤水図のレプリカ発行を目指し、資金300万円をクラウドファンディングで募っている。動きは県外にも広がっており、吉田松陰ゆかりの松陰神社(山口県萩市)でもレプリカが展示される見通しだ。佐川さんは「世界で通用する、誇れる先人の一人。地理の歴史の中に赤水図をしつかり位置付けたい」と語り、将来的には「世界ドラマ化を目指してい